◇◇ 特集「コミュニケーションの基礎・基本」

〈コミュニケーションの基礎・基本〉と教科書

斎藤 栄二
（平安女学院大学教授）

1．英語を使いこなせる力

英語を使いこなせる力については，私は次の 3 段階があると考えています。「相手の言うことがわかる → 自分の考えを述べられる → 相手と不一致点があっても交渉して一致点を探りつつ行動に移せる」。これをさらに単純化すると次のようになります。

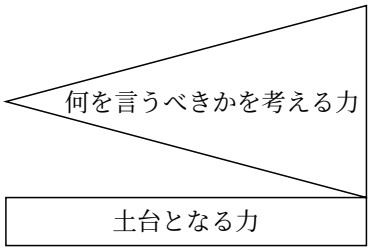
第 1 段階 受容型 → **第 2 段階 発信型** → **第 3 段階 交渉型**

この 3 段階のうち，私たちの行ってきた英語の授業は，どの辺まで生徒を持ってきているのでしょうか。第 1 段階の受容型というのは，私たちの英語教育では最も長い歴史を持っています。それに比べれば，発信型といってもごく最近のものにすぎません。ましてや交渉型などというのは，私も最近言い始めたことですから，その用語さえまだ馴染んでいないでしょう。もっとも最近では，ディベートなどをやる英語のクラスも出てきました。それはそれで良いのですが，日常的にアメリカやイギリスで暮らしてみてすぐ分かるのは，日常の言語生活の場ではめったにディベートなどしないということです。むしろ相手の考えを聞き，こちらの考えを述べて相寄りながら，ひとつの方向を探っていくということの方がずっと多いのです。そしてそういう交渉力の方が，はるかに実際的で有効なのは，日本語の場合を考えても極めて明白でしょう。

2．考える力

それでは，第 1 段階から第 2 段階，第 3 段階にいくにつれて要求される力というのは，どのようなものでしょうか。

第 1 段階 → 第 2 段階 → 第 3 段階



土台となる力の中心は文型駆使力です。しかしそれがいくらあったとしても，自分の考えにのっとって，言うべきことがなければ無に等しくなります。私はこの「土台となる力」と「何を言うべきかを考える力」を合わせて，これからの英語の力の基礎・基本だと考えます。

そしてむしろ「何言うべきかを考える力」こそが，21 世紀に生きる生徒に身につけさせてやらなければならない力の，メイン・パートだと考えています。今，教科書を世に出すとすれば，そのことを配慮しないわけにはいかないでしょう。そこを押さえて初めて，「21 世紀に生徒とともに生きる教科書」といえると私は考えます。

3．題材

私たち NEW CROWN の教科書編集陣は，そのことを意識した教科書づくりに努力を傾注してきました。私たちはそれを「題材重視」という言い方で表現していますが，そのことは NEW CROWN の伝統として今や，大きな柱となっており，しだいに先生方の支持を得るようになってきました。

私たちは「題材がよいのは結構なことだ」などと単純に言い切っているわけではありません。「本当のコミュニケーションの力を伸ばすのなら，英語を使うときに考える力は欠かせない」→「考える力を伸ばすためには，考えさせる要素をもっ

た題材を準備しなければならない」という考え方をしているのです。この考え方は，これからの21世紀に使われる教科書の中にも，十分に生かされていくものと思います。

NEW CROWNの題材の扱いの特徴を，現行の教科書から例を挙げて説明しましょう。まず，私たちは題材の中でも，ことばそのものについて考えるものを特に重要だと考えます。教科書の中に散見される，ことばについて考える内容を含んだ文を次に示しましょう。

I teach Japanese to Tom. Tom teaches English to me.（1年p.48）
Now Ainu teachers give their people language lessons. The language lives again.（2年p.55）
In Wales they have their own language.（2年p.60）
Kenya became independent in 1964. Now Swahili is an official language. But English is still popular in Kenya. So some people speak three languages, their mother tongue, Swahili and English.（2年p.79）
Some people in Canada speak English. Some people speak French. Both are official languages.（3年p.10）
I am interested in the Korean language. Korean is similar to Japanese in some ways, for example, in word order.（3年p.15）
Language is the life of the people who use it.（3年p.83）

私たちは，ものを考えるときには何を媒体としているでしょうか。それはことばです。ことばという媒体が無くては，ものを考えることなどできるわけがないのです。今あなたは何を考えていますか。その考えていることを目の前の紙に書いてみてください。それはおそらく日本語として書き出されるでしょう。そうすると，私たちの考え方は日本語の枠の中で行われているということになります。日本語を使いつつ，日本語を超えて思考をするというのは事実上不可能です。そういったことばの使用の長い歴史の中で，あなたというアイデンティティーが創られていきます。これは立派にひとつの文化と呼べる世界です。

続いて英語ではどうでしょうか。英語でも同じことが起こっています。英語で生活している人々は，英語の枠の中で思考作用を展開します。これも日本語とは違った巨大な文化圏を形作っています。続いて教科書には，韓国語が出る，ウエールズ語が出る，スワヒリ語が出る，ということになっています。私たちは，よく異文化理解ということを口にしますが，言語こそがきら星の如き異文化体の星雲なのです。

英語の教育は，ことばの教育です。ことばの教育なら，それぞれのことばの持っている異文化性に生徒の目を開かせたい。そういう考え方に沿って題材は準備されています。（もっともそれが題材準備のすべてではありません。）

いずれにしても，最初から上に述べたような考え方を，理論として生徒に説明する必要は全然ありません。それは教師として知っておくべきことです。あとは教科書の中にスパイラル式で出てくる教材に，生徒を十分に触れさせることです。そういった中で，教師は時折タイミングを見て，ことばとそれを話す人間との関係について考える機会を与えることです。そういうことを可能にする題材の準備を，私たちは心掛けてきています。

4．Personal Involvement型のすすめ

私たちは2.で述べたような意味において，考える力を伸ばす仕掛けを教科書に位置づける努力をしてきました。それは色々な形で教科書全体にちりばめられています。決して生徒に無理はさせないように配慮してありますが，そういう配慮の上に立って，少しずつ少しずつ，機械的な応答から自分の考えをベースにした応答へもっていくexerciseを，コミュニケーション活動の中に位置付けようと努力しました。

例えば，あるレッスンを読んだとします。その後でexerciseがあります。そのexerciseの内容には，Personal Involvement型とFact Finding型とがあります。

Fact Finding型とは，教科書本文の中から答えを探すような問いをいいます。例えばMartin Luther King, Jr.の話ですと，「彼のI have a dreamという演説はいつ行われましたか」「警察官がRosa Parksに“Move to the back”と言ったとき，Rosa Parksはどうしましたか」といった類の質問です。これらの答えはみな，教科書本文に書いてあります。誰が答えようと，それはみな同じ答えになりますが，この型のexerciseも，基本的な練

習として重要です。

Personal Involvement 型とは，文字通り一人ひとりの考え方が求められるタイプの質問です。例えば,「この課全体を通して印象に残った文を，本文から抜き出してみよう」は，Personal Involvement 型の質問になります。この質問に答えるためには，恐らく生徒は次の 3 つの知的段階を通らなければなりません。

(1)もう一度その課全体を読み直す。

この時,「どういう意味のことが書いてあったか」という英文解釈的な読み方ではなく，この課全体として「筆者は何を言おうとしているのか」というように，筆者の考え方の価値体系を知ろうとする読み方になります。

(2)その上に立って，全体の中でキーポイントとなっている文はどれなのかを，改めて探し直す。

これは単なる英文解釈から抜け出して，読書の持つ本来の姿に迫ることになります。

(3)自分の考えを述べ，他者の考えを知る。

例えば，We must fight to take any seat on bus. をあげる生徒も，He died, but people will long remember his words and thoughts. をあげる生徒もいるでしょう。どうして違ってきたのか。その理由は何なのか。話しあってみると，読み取りの質はいっそう深くなります。

大事なことは，これらのプロセスを経て，生徒は自分の頭を使って「考える」ことを始めるということです。その考えの質は，自分の意見や見方，考え方にかかわってくるということです。それが，本当の意味で実践的コミュニケーションの力を伸ばす道につながっていくのです。なぜなら，自分の考えなしで会話でもコミュニケーションでも，続行することなど全く不可能だからです。

＜新教育課程対応＞

これからの英語教育・国際理解教育は「知る」学習から「行動する」学習へ！

小・中・高を結ぶ

英語教育と総合的な学習

荒木英二・後藤英照［編著］A5判・220ページ・2,600円

◎特　色

1．他校種理解
実践的なコミュニケーション能力の育成は、小・中・高の学習の積み重ねから。他校種の内容を知るための貴重な情報を提供。

2．温故知新
これからの英語教育・国際理解教育は「知る」学習から「行動する」学習へ。何が大切で、何を改めるかを考える資料を提供。

3．豊富な事例
小学校の英語学習・国際理解、中学・高校の必修・選択外国語やこれらを生かした「総合的な学習」など、詳細で豊富な事例。

◎内容と構成

第Ⅰ章●国際化に対応する教育
第Ⅱ章●中学校・高等学校外国語教育の改善
第Ⅲ章●国語理解を中心とした「総合的な学習の時間」の指導
第Ⅳ章●小・中・高を結ぶ英語教育をめざして
第Ⅴ章●小・中・高における英語指導の実践事例
第Ⅵ章●小・中・高における「総合的な学習」の実践事例

中学の入門期にも便利です。

小学校 英語・国際理解教育用

First CROWNビデオソフト

First CROWN編集委員会［代表：森住　衛］編

全４巻（教師用指導書つき）
（20分×4巻）・（B5判・64ページ）15,000円
WORK BOOK B5判・32ページ・300円

三省堂（価格は税別）